



## 自分で考え、決められる子供に!part2

「わくわく通信89号」で掲載した「主体的に選択できる力」ですが、これは発達段階において選択場面を工夫することでさらに効果的になります。例えば、就学前～小学4年生の子供には、「服を選ぶ」「おもちゃを選ぶ」などの場面は小さな決断に最適です。その際、子供の決断が親の考えと多少違っていても、口出しせず見守るようにしましょう。しかし、安全面で危険だと感じたときや、他者に迷惑をかけるような場合は、迷わずそのことを真剣に伝えて理解させることも必要です。

また、子供は、大体2歳になるころには、二者択一できるようになってきます。そこで、小さな子供が着る服で迷っている様子なら、「どれを着る？」ではなく「今日のお洋服、どっちがいい？」と聞くようにすることで、決断力が養われます。子供が少し大きければ、親が判断に役立つ条件を子どもに伝えてあげると効果的です。なかなか子供が決断できない場合、「半袖のシャツと長袖のシャツ、どっちを着る？」だけではなく、「今日は少し寒くなるみたいよ」と条件を加えると、子どもは「寒くなるなら長袖にする」と、自分なりに条件をクリアして決断することができます。

さらに効果的な選択場面があります。それは、家庭の中で、「自分は役に立つ!」と感じられるようにするために「選択」させるのです。役割を与え、その結果を評価することで内発的動機付けとなり、子供たちの「主体的に選択できる力」が強化されていきます。例えば「今日、何か家の手伝いをしてくれる?」と頼み、「食事のお皿を下げる」「お風呂を洗う」「ゴミを出す」など子供自身に役割を「選択」させるのです。この役割は成長に合わせて、難易度を上げていくことも重要です。ゴミを出すだけでなく、ゴミを仕分けられるようになるなど、任される役割が変わるので、子供自身が自分の成長に気付くことにもつながります。ちゃんとお手伝いをしてくれたら「ありがとう!助かるよ!」と声をかけ、まだのようでしたら「〇〇してくれた?お願いね!」と声をかけることが肝要です。このように、してくれたことに対しては、その行動をちゃんと認めて、感謝の気持ちを伝えることが大事ですし、やらなかったことに対しては、否定するのではなく行動を促すことが大事です。このことが、自己有用感の高まりへと繋がっていくので一挙両得となります。



元筑波大学附属小学校の副校長田中博史氏は、子供ならではの口癖に「どうして?」というものがあるけれど、じつは大人が子供に向かって発するべき言葉でもあると述べます。「しっかり考えなさい」といくら子供にいい聞かせたところで、実際に子供が考えているかどうかはわかりません。しかし、子供の発言に親が「どうして?」と声をかけることで、より深く考えさせることができるとのこと。親が「どうして?(それを選んだの?)」と聞いてみれば、子供にとっては考える機会となります。たとえ「好きだから」「嫌いだから」といった単調な答えが返ってきたとしても、「そっかあ、じゃあ、どんなところが好き(嫌い)?」と聞いてみるのです。こうした「どうして?」の繰り返し、子供の「自分で考え、決める力」を伸ばすのです。